

「～に走る」・「～に歩く」のメトニミー構造¹

湯本 久美子

[キーワード] Japanese motion verbs, Metonymy, Reference point,
Target, High stativity

1. はじめに

人間の行動に不可欠かつ同一の身体行為である「移動」を表す言語表現の振る舞いが日英語で異なっていることは非常に興味深い。相違の第一は、英語の run/walk はそれのみで着点句 to～ と共起するが、日本語の「～に歩く」・「～に走る」は「いく」を補う方が自然な場合が多いことにある。

1) He used to walk to the studio where he was learning to paint.

影山・由本 (1997:137)

2) ?*彼は絵を習っているスタジオに歩いたものだ。 影山・由本 (1997:137)

3) 彼は絵を習っているスタジオに歩いていったものだ。

第二に、英語では活動動詞 (activities) である run/walk は着点句と結合することにより、主語が着点に到着 (accomplishments) したことを表現するが、日本語の場合には5)の後続文が可能なことから必ずしも到着を表現しない。この日本語の特徴は、主に着点句である「に」格の性格から説明されている。

4) Taro ran to the station.

5) 太郎さんは駅に走っていきました。もうすぐ到着すると思います。

これらの「走る」, 「歩く」, run, walk, は移動の様態を伝える移動様態動詞 (verbs of manner of motion (ref. Levin (1993:264/265))) と呼ばれている。この「様態」という概念は, Jackendoff (1983/1990) の概念意味論 (Conceptual Semantics) を基本とする様々な先行研究において, 移動という一連の行為を要素に分解し説明を与える場合に日英語に共通する有効な概念として一般的に用いられているものである。そして, 認知言語学 (Talmy (1985/2000a /2000b)) においても, ある行為や言語表現における要素同士の結合に着目する分析方法は有意義であるとされている。

しかしながら, 「に」格を伴う「走る」と「歩く」が何故下記の例文において容認度が上がるのかについて, 「様態」という要素は説明を与えることができない。話し手が主語の移動行為をどう解釈 (construal) しているのかという角度からの考察が不足していることにその理由があるのではないかと考える。

6) さっそく, 使いが稲葉山城に走った。 影山・由本 (1997:138)

7) 居間のソファではなく, 台所に近い食卓の椅子に孝平は歩いた。

『丘上の向日葵 209』岡田 (2001:8) 下線も岡田による

本論では, 通常周辺用法と見なされ研究対象とされていない「～に走る」と「～に歩く」が自然な例文を分析対象とする。まず, 「～に走る」と「～に歩く」は認知主体 (conceptualizer) による事柄の解釈 (construal) を表出していることを述べる。そして移動様態という視覚的な際立ちを持つ動詞が参照点となり, 認知主体の解釈の表出 – 移動の「目的」と主語の「状況」– がターゲットになっているメトニミー構造をなしていることを説明する。

本論の構成は次の通りである。2 節では移動動詞に関する先行研究の概略を示し, 本論の研究テーマを述べる。3 節では文例分析から「～に走る」と「～に歩く」は話し手の事象に対する有標の解釈を伝えるものであることを説明する。4 節ではメトニミーからの説明を試み, 「高状態性」というターゲットス

キーマを求める。5 節は結論としてまとめをする。

2. 先行研究：移動動詞研究

本節では、まず日本語移動様態動詞に関する先行研究に基づき、①主な研究枠組みを紹介し、②日本語の特徴を明らかにするために英語との対照点を説明する。次いで、③問題提起をし、本論の研究テーマを明らかにする。

人間を取り巻く環境そして人間自体の行動は静止と移動に大別できる。そこから日英語の対照研究において移動表現は注目を集めている事象であり、多くの優れた先行研究がある。そしてこの研究は二つの枠組みに代表されているようである。

一つが Jackendoff (1983:172/1990:57) が提唱する Conceptual Semantics (概念意味論) の枠組みである。この枠組みにおいては移動という抽象的概念を GO で表示し、移動に伴う要素、例えば移動物は Thing, その移動物がたどる経路(起点・経路・着点)を Path と表し、移動表現はこれらの要素の組み合わせで成り立っているとするものである。一例をあげると、“John went home at 6:00.” は [event GO ([thing JOHN], path TO ([place HOME])))] (Jackendoff (1990:57)) と表記される。

この枠組みに従って、例えば、田中・松本 (1997:128-130) は、8) の文を 9) の要素に分解し、各々の要素が移動表現において果たしている役割を説明している。

- 8) The boy slid down into the pool in just a few seconds. 少年はほんの数秒でプールの中に滑りおりた。 田中・松本 (1997:128)

(34)

- 9) The boy slid down into the pool in just a few seconds.
- (1) 移動物 GO { (2) 経路 (起点・経路・着点) (3) 継続時間
 (4) 様態
- down into the pool
- (2B) 方向 (2A) 位置
- in to the pool
- 基準物との関係 着点 基準物

この例文では顕在化されていないが、他の移動構成要素として「付帯状況」(例:「歌いながら」), 「付帯変化」(移動に伴う移動物の状態変化), 「原因」(移動を生じさせる外的原因) が挙げられている。

もう一つのアプローチは、類型論・認知言語学の立場に立つ Talmy (1985/2000a:Chap 3/2000b) による“Event Integration”(イベント統合) という考え方である。Motion (移動という概念) は次の四種類の概念の組み合わせである。Jackendoff と同じく要素に分解はしているが、移動という概念を「地」と「図」そして「グラウンド」という認知の観点から整理しているという違いがある。

10) Motion 移動という概念であり MOVE と表記

- (1) 移動物 イベント全体において Figure の役割を果たす object
- (2) グラウンド Figure の経路や場所を特徴 Ground する参照点として働く object
- (3) 経路 Figure が Ground に関して占める path/site の総称である Path
- (4) サポート事象 移動をサポートする事象であり Manner (様態) ・ Cause (原因)

例えば、11) の文は support relation が Manner であり、12) として表記され

ている。そして 11) の動詞 float は移動と様態の二つの意味要素が一つの動詞の中に包み込まれており、このような含入関係は“conflation”（融合）と呼ばれている。

- 11) The bottle floated into the cave. Talmy (2000a:227)
 12) [the bottle MOVED in to the cave] WITH-THE-MANNER-OF (it floated) Talmy (2000a:227)
 13) ボトルが洞窟に流れ込んだ。

さらに、Talmy の一連の研究はこの意味要素の融合方法が言語によって異なると主張している点が興味深い。この主張によると、英語は“in that they place their Path component, or core schema, in the satellite, rather than in the verb.” (2000a:225) であり、英語において経路は動詞ではなく、衛星的に表現される言語、「衛星枠付け言語 (satellite-framed language)」(2000b:359) である。一方、日本語については、「中核スキーマを動詞に写像する特徴を持つ言語は枠付け動詞 (framing verb) を持つといい、動詞枠付け言語 (verb-framed language) と呼び、そのような言語には……日本語……が含まれる。」(2000b:359) と説明している。

英語は 11) のように経路を前置詞に導かれる要素“into the cave”で表現し、“float”で「流れ」と「移動」の両方を表現していることからわかるように、様態が動詞に融合される特徴を持っている。一方、日本語は 13) の「流れ込む」の複合動詞が示すように経路が動詞の中に融合され、複合動詞で表されるという特徴を持つ。さらに、日本語の場合、様態を融合している動詞は「歩く・走る・駆ける・這う・滑る・転がる・跳ねる・舞う・泳ぐ・飛ぶ・潜る・流れる・急ぐ」(田中・松本 (1997:143)) と少なく、多くが付加詞的に表現される(宮島 (1984))。例えば、英語の“amble”に対応する日本語は「ゆっくりと歩く」という副詞+基本動詞の組み合わせである。

融合特徴のみならず、日英語の移動様態動詞は着点句に関する次の二点にお

いて著しい相違がある。

第一点は、日本語の場合、移動様態動詞のみでは着点句である「に」格と共起しづらく(松本(2003:57), 影山(1996:98)), 「～に歩く」より「～に歩いていく」を自然であると判断する母語話者が多いことである。例えば、4)の“ran”と“to the station”は自然な組み合わせであるが、文脈が特定されていない場合には日本語直訳の14)「走った」より15)「走っていった」のほうが自然である。この特徴について、影山・由本(1997:137)は「……日本語では『*スタジオに歩いた』というのは非常に不自然で、『歩いて行った』のように表現する必要がある。この制限は『歩く』だけに限られず、『走る、這う』など他の移動様態動詞にも一般的に見られる。」と述べている。

4) Taro ran to the station.

14) ? 太郎は駅に走った。

15) 太郎は駅に走っていった。

16) She walked into the studio.

影山・由本(1997:137)

17) *彼女はスタジオの中に歩いた。

影山・由本(1997:137)

「いく」を補わない移動様態動詞と「に」のみの組み合わせも見られるが、この現象を影山・由本(1997:138)は次のようにとりあげている。

しかし物理的な移動については、現代の日本語では「に」と「へ」の区別がかなり曖昧になっている。「～に歩く/走る」という形式を許す話し手がいるし、実際、そのような例は小説などにも見つけることができる。(17) さっそく、使いが稲葉山城に走った。(司馬遼太郎『国盗り物語』)しかしながら、ここで真に重要なのは、「に」か「へ」かという格助詞の形ではなく、示された場所に本当に到着しているのかどうかという含意である。例えば、下の(18a)の英語は意味的に矛盾しているから、英語の to the bridge は実際に着点を意味している。ところが日本語では上の(17)に続けて(18b)のように言うことが可能である。

(18)a *Jacob walked to the bridge but didn't get to the bridge. Tenny 1995

b しかし、使者は途中で待ち伏せによって殺され、稲葉山城に辿り着くこ

とはできなかった。

影山・由本 (1997:138)

さらに、「歩く」は着点の「に」のみならず起点の「から」とも整合しない (影山・由本 (1977:139-140))。

18) The President walked slowly out of the room. 影山・由本 (1977:139)

19) *大統領はゆっくりと部屋の中から歩いた。(「部屋から出た」)

影山・由本 (1977:140) 下線は筆者による

第二点目は、前述の影山・由本 (1997:138) の説明にもあるように、日本語の場合、移動様態動詞+着点句で主語の着点への到達を表すことがむずかしいという点である。例えば、上記の英語の4) “Taro ran to the station.” は太郎が駅に到着したことを表現している。が、日本語の場合、5) が可能であることから「駅に走っていった」は「駅に到着」しているかどうかまでは伝えていない。同じく、「駅まで走っていきました。」の「まで」の場合もやはり同じ後続文が可能であり、主語の着点への到着を必ずしも意味しない。さらに「まで」は「経路性を前提としており」(岡田 (2001:10)), 「移動が及ぶ範囲を限定する働き」(影山・由本 (1997:141)) をもち、純粋な着点句とは異なる (宮島 (1984:16))。一方、「を」との共起には問題がない。つまり「日本語の移動様態動詞は経路をカバーするだけに留まり、着点にまで言及することはできない。」(影山 (1996:102)) のである。

5) 太郎さんは駅に走っていきました。もうすぐ到着すると思います。

20) 太郎さんは駅まで走っていきました。もうすぐ到着すると思います。

21) 太郎さんは土手の上を走った。

着点に関係するこれらの相違²は、英語においては活動動詞である移動様態

動詞が何故到達の意味を表すことができるのかという疑問へと続く。この点において概念意味論に基づく Levin & Rappoport (1988) は Lexical subordination (「語彙従属」- 影山・由本 (1997:149) による訳語) による操作を提唱している。

Lexical subordination takes a verb in its original, or basic, sense and subordinates it under a lexical predicate. The verb in each of the above constructions has a complex LCS, derived from the verb's original LCS, as schematized in (20):

- (20) LCS: manner/instr → LCS [result by manner/instr]
 (By is used to represent 'by means of' or 'in the manner of')

This rule describes the lexical subordination process, which involves taking one LCS, schematically indicates as a manner of instrument clause on the left side of the arrow, and creating a new LCS, shown on the right side of the arrow. This new LCS involves a new component, represented as result, which is the main clause under which the original LCS is subordinated, becoming a means or manner component in the new LCS.

Levin & Rappoport (1988:282)

つまり、主動詞で表される様態・手段は従属節 by manner/instrument と解釈され、そこから結果表現となるという説明方法である。

しかし、この説明方法では影山・由本 (1997:160) が指摘しているように、何故、主動詞が従属節へと変化するのか、従属によって生み出される概念が結果と解釈される必然を持つのか明らかにされていない。また、何故日本語にはそのような解釈が不可能なのかもわからない。

そこから、影山 (1996) は日英語においては概念合成の方法が異なると述べている。影山 (1996:91) は、「日本語は動詞の形態的な合成を好む言語であるのに対し、英語は意味構造 (語彙概念構造) における合成を発達させた言語である。」と説明している。つまり英語においては活動動詞である “run” が着点句と合成することにより、意味構造が豊かになり到達まで表現できるが、日本語にはそのような操作はなく、その代り複合動詞が発達しているという説明で

ある³。

そして、日本語様態動詞の非終結的な特徴の理由について松本 (2003:73) は「二格句の性質 (およびその特性と動詞の意味の両立性) が問題の根元にある」と説明している。この非終結性は日本語全般の傾向とかかわりを持つ。影山・由本 (1997:139) は「これまで移動動詞を扱った研究では、もっぱら着点の方に関心が向けられてきた。……日本語では結果の達成を重視しないという傾向があることと関連づけられることもある。」と述べ、影山 (2002) では「有界性 (boundedness)」が鍵であるとその議論を発展させている。(ref. 池上 (1993))

「スル型」と呼ばれる英語は、行為者の視点に立つことによってその行為の結末に注目する、有界性の強い (+ Bounded) 言語であるから、継続的な〈活動〉や〈移動〉の後に有界的な前置詞句などを継ぎ足すだけで完結的な事象を作り出すことができる。他方、「ナル的」と呼ばれる日本語は行為連鎖において中程の位置に視座を置き、出来事の過程に目を向ける – 言い換えると有界性が不定である (0Bounded)。その結果、非完結的な事象に限界を加えるためには、「流れ着く」のように完結的な動詞を主要部に補うことが必要になる。

影山 (2002:3)

以上が日英語の移動様態動詞の相違を巡る主な議論であり、日本語移動様態動詞の特徴をこの議論から見るができるだろう。日英語における動詞融合と「ナル的・スル的」傾向の相違、そして日本語の仕組みにおいて重要な役割を果たす格助詞がこれらの相違点に大きく影響していることは否めない。

しかし、既に述べたように一般的には「～に走っていった」の方が「～に走った」より自然であるが、それにも拘らず「～に走った」のみでも自然な場合がある。何故自然なのだろうか。この疑問について先行研究は「へ」と「に」の意味の曖昧さ以外に何も説明を与えていない。

6) さっそく、使いが稲葉山城に走った。 影山・由本 (1997:138)

22) さっそく、使いが稲葉山城へ走った。

(40)

さらに、「使い」が稲葉山城に到着したという含意がなく、稲葉山城に向かったことのみを表現している状況においても、一般に方向を表すといわれている22)の「へ」より6)「に」のほうが筆者には相性が良いように感じる。その理由も不明である。

筆者のこれらの疑問は、移動という一連の行為を要素分解・要素結合のみで説明しようとするアプローチに対する問題提起へと繋がる。そしてこの点に関し英語移動動詞については認知言語学の枠組みの中で既に議論されている。

Taylor (1990) は Jackendoff による Conceptual structure と 3D model representation (知覚的意味を示すもの) の説明では +manner の移動動詞として分類されている run と jog の違いを説明することができないとして、下記の例文を挙げて疑問を提示している。そして百科事典的知識 (ICM) が run と jog の違いを説明するのに必要であると主張している。

Likewise, you can *run over the road*, *run into a brick wall*, *run onto the playing-field*, *run away from the police*, *run upstairs*, *run to the bathroom*, whereas the same expressions with *jog* are decidedly odd. Taylor (1990:29)

- 23) ?He jogged a mile. Taylor (1990:28)
- 24) *He jogged a mile in ten minutes. Taylor (1990:28)
- 25) *jog to catch the bus. Taylor (1990:28)
- 26) ?He jogged into the road (and almost got killed by a truck)
Taylor (1990:29)

同様の考え方は Tenny (1995) にも見ることができる。Tenny は二種の情報 – a highly structured, templatic part of the meaning, based on aspectual properties of the verb (従来の意味論レベルに相当) と and a part of the meaning which contributes to filling gaps in the templatic information (従来の語用論的レベル・百科事典的知識を指す) – の両方が verbs of motion の分析に必要であると主張している。そこから、templatic part of the mean-

ing のみでは容認度の説明ができない例として、下記の例文を挙げている。

27) Mary walked the hills of Scotland ??in three months/for days.

Tenny (1995:55)

要素の合成は言語において重要ではあるものの、Taylor と Tenny の研究はそれのみでは不十分な説明であることを示している (ref. Taylor (2002:96), Langacker (1987: FCG I-76))。日本語の移動様態動詞についても、事柄をどのように認識するかという認知主体の解釈 (construal) の仕方が言語表現にあらわれているという視点から分析すべきではないだろうか (ref. 松本 (1997))。

このような問題提起から、本論では周辺の用法とされ研究対象と見なされない「～に走る」と「～に歩く」が自然なケースを分析することにより、日本語の移動動詞においても要素の合成という概念のみでは意味を説明することが不十分であること、分析において認知主体の事柄に対する解釈が重要であることを説明することを研究テーマとする。

本節では、日英語の移動動詞分析の有力仮説を紹介し、日本語移動様態動詞の特徴を述べた。次いで、日本語の「～に走る」・「～に歩く」が可能な文例を認知主体の解釈という視点から分析する意義を説明した。

3. 「～に走る」・「～に歩く」は移動様態動詞か？

本節では「『～に走る』と『～に歩く』は移動の様態のみを表現しているのか？」という疑問を提示し、各々が一連の移動行為を踏まえながらも異なった部分を焦点化していることを説明する。

通常では容認度の低い「～に走る」と「～に歩く」が自然な場合がある。どのような場合が自然なのだろうか。

まず「～に走る」から見ていく。

28) 忘れ物を取りに家に a) 走りました/b) 走っていきました。

(42)

- 29) 自分のことがA新聞に出ているのを今朝知り、その新聞を買いに駅に
a) 走りました/b) 走っていきました。
- 30) 試験を受けに試験会場に a) ?走りました/b) 走っていきました。
- 31) 授業を受けに学校に a) ?走りました/b) 走っていきました。

全ての例文は話し手が「に」でマークされる場所に急いで移動したことを表しているが、筆者の判断では、「忘れ物をとりに」や「新聞を買いに」に比べて「試験を受けに」と「授業を受けに」の場合は容認度が低く「走っていきました」のほうが自然に感じる。

さらに次の二例は同じく「お醤油が足りないことに気づいた」場合であるが、気づいた時が「お料理をしている最中に」のケースのほうが「この間」より容認度が高い。また、「お歳暮」と「デパート」の組み合わせの場合も自然とは感じられない。

- 32) (お料理をしている最中に) お醤油が足りないことに気がついたので、
スーパーに a) 走りました/b) 走っていきました。
- 33) この間お醤油が足りないことに気がついたので、さっきスーパーに a) ?
走りました/b) 走っていきました。
- 34) お歳暮を買いにデパートに a) ?走りました/b) 走っていきました。

これらの違いから、「～に走る」の容認度が上がるのは緊急でかつ話し手が予期していなかった場面のようなものである。授業や試験を受けることは以前から話し手にとり予期できた行動であり、お歳暮の買い物は緊急性が低くかつ以前から話し手はその買い物の心積もりをすることができる。お醤油が以前から切れていたことを知っている場合も同じである。それに比べて、外出時の忘れ物や、料理中にお醤油がないことに気がつくのは突発的なことであり、かつ緊急を要することである。そして自分の名前が新聞に出ていることを知ることも予期せぬ出来事である。

しかし、予想外で緊急性が高い事柄ならばどの事柄でもよいということもな
 いうのである。寝坊や遅刻のように予想外で緊急性は高いものの、日常起こり
 うる事柄の場合は不自然である。

35) (私は) 寝坊したので/遅刻したので 駅に/学校に a) ?走りました/b)
 走っていきました。

これらのことから、単に足を速く動かし急いで行く様態ならば全ての状況に
 「～に走る」を使えるのではなく、+緊急性+予想外+非日常的な出来事であ
 る場合に容認度が高いということになる。

さらに 34) の「お醤油が足りないことに気がついたので、スーパーに走り
 ました。」の場合、スーパーに行って何をするか、「お醤油を買うこと」は言語
 化されておらずとも理解できる。ということは+緊急性+予想外+非日常性を
 伴うフレームにおいて、「～に走る」は言語化されていない主語の次の動作、
 つまり目的地点についた後の目的行為を指し示すことができることも示してい
 る。

前節で紹介した影山・由本 (1997:138) による例文、「さっそく、使いが稲
 葉山城に走った。」はこれらの全ての条件に一致する。この文からは緊急性を
 感じ取ることができ、稲葉山城に到着した後にその使いが何をするのも容易
 に想像できる。一方、36 a), 37 a) は自然さが落ちる。

36) 使いが稲葉山城に X 日に行くことは以前から予定されていたので、使い
 が稲葉山城に a) ?走った/b) 走っていった。

37) 定例の連絡のために、使いが稲葉山城に a) ?走った/b) 走っていった。

次に同じテストを「～に歩く」で行ってみる。まず、+緊急性+予想外+非
 日常性を見る。

38) 忘れ物を取りに家に a) ?歩きました/b) 歩いていきました。

(44)

- 39) 自分のことが A 新聞に出ているのを今朝知り、その新聞を買いに駅に
a) ?歩きました/b)歩いていきました。
- 40) 試験を受けに試験会場に a) ?歩きました/b)歩いていきました。
- 41) 授業を受けに学校に a) ?歩きました/b)歩いていきました。
- 42) (お料理をしている最中に) お醤油が足りないことに気がついたので、
スーパーに a) ?歩きました/b)歩いていきました。
- 43) この間お醤油が足りないことに気がついたので、さっきスーパーに a) ?
歩きました/b)歩いていきました。
- 44) お歳暮を買いにデパートに a) ?歩きました/b)歩いていきました。
- 45) 寝坊したので/遅刻したので 駅に/学校に急いで a) ?歩きました/b)歩
いていきました。

全ての場合において、「～に歩いていく」が「～に歩く」より自然である。かつ、「～に走る」とは異なり、「～に歩く」の場合は、到着地点における目的行為を非言語化することはできない。

- 46) お醤油が足りないの、a) ?スーパーに歩いてくれる?/b) ?スーパーに歩いていってくれる? c)スーパーに買って来てくれる?/d)スーパーで買って来てくれる?

従って、「～に歩く」は±緊急性±予想外±非日常性という概念から整理できず、かつ、移動の目的に焦点が当てられていない。つまり「～に歩く」は「～に走る」とは異なった角度からの分析を要する表現ということになる。

では「～に歩く」はどのような状況にならふさわしいのだろうか。岡田(2001:8)は「『あるく』が『(場所)に』とともに用いられることは、例20のように不可能ではないとしても、自然な例であるとは言えない」と述べている。

- 47) 居間のソファではなく、台所に近い食卓の椅子に孝平は歩いた。

『丘の上の向日葵 209』岡田 (2001:8 の例文 20) 下線は筆者による

岡田は上記の例文は自然ではないとしているが、使われていることは事実であり、筆者にはこの例文は容認度が高い。そして他にも不自然とは言えない例文は考えられる。

- 48) 通学路の混雑状況を調べに駅に歩きました。
 49) 北ではなく南に歩きました。
 50) 考え事をしながら駅に歩きました。
 51) サンダルのまま駅に歩きました。

興味深いことに上記の下線部分を削除すると容認度は落ち、「いった」の付加や異なった助詞の使用が自然である。

- 52) a) ?食卓の椅子に孝平は歩いた。 b) 食卓の椅子に孝平は歩いていった。
 53) a) ?駅に歩きました。 b) 駅に歩いていきました。
 54) a) ?南に歩きました。 b) 南に歩いていきました。

ということは、「～に歩く」の容認度を上げているのは、下線部分ということになる。そしてこの下線部分が示しているのは「歩いている」主語の状況－「に」でマークされる場所へ「歩く」という行動を起こすに至った理由や、主語が歩いているときの状態である。別な言い方をすると、あたかも話し手がビデオの一場面をスローモーションで見て、主語の様子を注視しているかのような静的・状态的描写の場合に「～に歩く」の容認度が高くなる。

興味深いことに、「に」が付加されていない「歩く」のみが用いられた場合にも静的・状态的描写において容認度が高くなる。岡田 (2001:18) は『『あるく』は、場所を表す名詞とともに用いられない場合には、例 36, 37 のように、どこからどこへの、どこを經由しての移動であるか、ということは問題ではな

(46)

く、運動そのものが問題になる。」と述べ次の例文を挙げている。しかし、「運動そのもの」というより、「歩く」という運動をしているときの主語の状況に焦点が当てられていると解釈すべきではないだろうか。

55) たぶん気分が悪いのだろう。ふらつくようなところはなかったが、歩くだけで精一杯なのかもしれない。

『丘上の向日葵 26』岡田 (2001:18 の例文 36)

56) 右手に冷凍食品のずっしりと重い袋を提げ、左手にはパンの入った方を抱くという形になった。歩くのに骨が折れる。

『恍惚の人 5』岡田 (2001:18 の例文 37)

さらに、岡田 (2001:19) は「移動距離を示す名詞 (句) とともに用いられない場合には、『あるくと』の後に何らかの場所の描写が続けられることはない。あとに続くのは移動主体の状態変化を示す表現なのである。」と述べている。

57) そうだね。おばあさまは外を歩くと、すぐくたびれるものね。……

『塩狩峠 29』岡田 (2001:19) 下線も岡田による

58) クレゾールの臭いの漂う白い廊下を歩きながら彼は悲しい気持ちになった。

『悪魔の午後 上 29』岡田 (2001:19) 下線も岡田による

59) 廊下を歩きながら、私はすごく緊張した。

『きらきら 143』岡田 (2001:19) 下線も岡田による

岡田による全ての例文は主語を注視している話し手の視線、そして主語の状況を静的・状態的に捉えている話し手の視線を表している。

ここで、「～に走る」と「～に歩く」を整理する。「～に走る」は、+緊急性+予想外+非日常性伴うフレームにおいて走って到着した場所で主語が何か行動することに焦点が置かれている。一方、「～に歩く」は到着地点における主語の行動ではなく、到着地点に到るまでの主語の状況に焦点が置かれてい

る。田中・松本(1997:128-130)の用語を借りると、「～に走る」は+緊急性+予想外+非日常性を伴う「原因」から引き起こされる「結果」へと向かう「目的」を焦点化し、「～に歩く」は主語の「状況」を焦点化しているという違いである。「～に走る」と「～に歩く」の相違はけして動作の速さの違いではなく、一連の移動行為のどこが焦点化されているかの違いである。

この違いは興味深いことに慣用表現にも見ることができる。まず「～に走る」は、通常妥当であると考えられる行動、つまり予想内や日常的な事柄ではなく、それに反した+予想外+非日常性を表す事柄と結びつく。次いで、行動にいたるまでの議論や思考などは結びつかず、事柄の最終地点と結びつく。さらにこれらの表現は「～に歩く」では置き換えることができない。

- 60) a) 非行に走った。 b) *善行に走った。 c) *非行に歩いた。
 61) a) 悪に走った。 b) *良に走った。 c) *悪に歩いた。
 62) a) 結論に走った。 b) *議論に走った。 c) *結論に歩いた。
 63) a) 感情に走った。 b) *思考に走った。 c) *感情に歩いた。

一方「～に歩く」は類似の慣用表現を持たず、「歩み」という名詞形が用いられる。「～に歩く」が主語の状況に焦点を当てた話し手の解釈を示すことから、状態性のより高い名詞形が慣用表現として定着しているのではないかと思われる。これらの慣用表現が示しているのは、各々の主語が着点へどのように向かっていったかの過程描写である。また、「走り」に置き換えることはできない。

- 64) a) 花子ちゃんの歩み b) *花子ちゃんの走り
 65) a) この一年の歩み b) *この一年の走り

本節では、「～に走る」と「～に歩く」が自然な文例を検証した。その結果、「～に走る」は+緊急性+予想外+非日常性を伴うフレームにおける「目的」

(48)

を焦点化, 「～に歩く」は主語の「状況」を焦点化しており, 焦点が異なるということを説明した。

4. メトニミー構造

本節では, 「～に走る」と「～に歩く」は“active zone phenomenon”を示しており, メトニミー構造を持っていること, そして高状態性をスキーマとして持っていることを説明する。

前節の分析結果は「～に走る」と「～に歩く」を単に様態が異なる移動動詞として捉え, 要素結合によって文の意味を説明するアプローチのみでは不十分であることを示していると考える。したがって, 次に検討すべきことは「～に走る」と「～に歩く」をどのように整理すべかという問いであり, 本節ではこの二つはメトニミー構造を示しているという説明方法を提示したい。

メトニミーという概念は, 移動動詞の説明にも用いられている。影山・由本(1997:156-159)は, 英語の雑音発散動詞 (verbs of sound emission) が経路表現を伴う場合には移動表現となることを挙げ, 「移動を特徴づける音声を, メトニミー (metonymy) によって移動そのものとして表現したもの」と述べている。そして, 影山・由本 (1997:159) は, 「一般に日本語は英語と比べるとメトニミーが少ないように思われるが, この場合も, 音声の発散という特徴だけで移動を表現することができないのである。」と述べている。

- 66) *煙突から煙がブカブカした。 影山・由本 (1997:159)
- 67) Smoke puffed out of the chimney. 影山・由本 (1997:157)
- 68) *すすが煙突からパラパラした。 影山・由本 (1997:159)
- 69) Soot and ashes fluttered down from the chimney onto the andirons in the fireplace. - *Close Encounters* 影山・由本 (1997:157)
- 70) *蜂は空中をジグザグした。 影山・由本 (1997:159)
- 71) Bumblebees...zigzagged into the air before us. (LOB:G 19 31) 影山・由本 (1997:157)

確かに、英語のオノマトペは経路表現を伴うことにより移動表現となるが、日本語はならない。この点において日本語の移動動詞はメトニミー性質を持たない。

72) The train moved clickety-clack down the tracks.

田守・スコウラップ (1999:105)

73) ??The train moved clickety-clack.

田守・スコウラップ (1999:105)

74) *電車が線路の上をガタゴト動いた。

75) 電車が線路の上をガタゴト走った。

しかしながら、影山・由本のメトニミーの解釈は、伝統的な範疇にとどまっておらず、その範囲において日本語のメトニミー性質の乏しさを指摘しているに過ぎないとする。

メトニミーは“Active zone”という人間の認知能力とその言語化現象と密接な関係を持っている。“Active zone”について Taylor (2002:110-111) は次のように説明している。

Active zone. If an entity A participates in a situation, often certain parts of A are more intimately involved in the situation than others. These constitute the active zone of A. The active zone phenomenon is ubiquitous. Here are some more examples:

- (13) a. I had my car served.
 b. I had my car washed and waxed.
 c. My car got scratched (in the accident).

Taylor (2002:110-111)

三例文とも“my car”という同じ単語が用いられている。しかし、同じ際立つ「車」が参照点として使われているにもかかわらず指示しているのは、(13a) はメカ、(13b) は外装、(13c) は外装の一部である。「車」には様々な構成要素があるが、そのある部分が各々焦点化・活性化され、ターゲットとなっている。

(50)

この車の例はターゲットが目に見える物であるが、このメカニズムは拡張され、事柄にも当てはまる。例えば、同じ何かを送るという一連の行為において与格構文は送るというプロセスを、そして二重目的語構文は所有という部分を活性化させている。参照点は同一動詞“sent”であるが、構文によってターゲットが異なるのである。

76) 与格構文 Sally sent a letter to Harry. 西村 (2002:300)

77) Sally sent a letter to Harry, but he has not received it.

78) 二重目的語構文 Sally sent Harry a letter. 西村 (2002:300)

79) ?Sally sent Harry a letter, but he has not received it.

“Metonymy can be defined as occurring when different uses of a given expression, while activating a single shared frame, highlight different facets of that frame.” (西村 (2002)・西村 (2005)) と説明されているとおり、同一フレームにおいてどのような言語表現が用いられるかによって焦点化部分が異なる。このような現象もメトニミーである。そして、このメトニミー現象はより抽象度を高めた心的レベル — 話し手が主語の移動行為をどのように見ているかという心的レベルにおける焦点化にも適応されるのではないかと考える。

まず、移動行為は複数の表現方法が可能である。主語が「に」でマークされている場所に移動したことを表現するためには「走る」や「歩く」を用いずとも他の表現を用いることができる。「走る」は「副詞+いく」で表すことができる。「歩く」は「歩いた後どうしたか」を表す「入る」でも可能である。

80) a) 太郎は駅に急いでいった。 b) 太郎は駅に走った。

81) a) 太郎は部屋に入った。 b) 太郎は部屋に歩いて入った。

p.c. 田辺正美

そして先行研究及び本論の分析からも「～に走る」・「～に歩く」は生起制限が

きびしい。従って、無標ではなく有標表現である「～に走る」と「～に歩く」をわざわざ選択する話し手は、それを選択することによって移動現象そのものではなく、その事柄をどのように見ているかという話し手の解釈を聞き手に伝えたいとしているのではないだろうか。

言い換えると、「～に走る」と「～に歩く」は両方とも身体的な様態を示す視覚的に際立ちを持つ動詞であり、これらの様態は参照点となりうる。これらの動詞が「～に」という構文の中で使われることにより、身体的様態が参照点となりその移動行為をどのように捉えているかという話し手の解釈を焦点化・活性化すると考える。焦点化されているのは「～に走る」の場合は一連の移動行為の「目的」であり、「～に歩く」は主語の「状況」である。従って、メトニミーを影山のように狭義または伝統的に捉えるのではなく、西村の定義を拡張して、日本語の移動様態動詞「～に走る」と「～に歩く」を見直すと、これらはメトニミー現象の遍在化の一例であると考えられる。

この焦点化の相違を支えるのは話し手の持つ百科事典的知識に基づく経験的推論である。「歩く」より「走る」は足の動きが速い、さらに普通の状況では走って移動するのは一般的ではない。速く⁴移動するにはそれだけの理由、+緊急性+予想外+非日常性を伴う状況において到着地点における強い目的があるはずであるという推論である。「走る」の持つ「速さ」という具体的移動様態を参照点として用いることにより、その移動を「有目的移動」(p.c. 田辺正美氏)と捉えている話し手の視点、ターゲットを伝えているのが「～に走る」構文であると考えられる。

既に説明したように、「～に走る」の場合には、例えば、「スーパーに走りました」の場合は、「お醬油を買う」という行為が言語化されておらずとも、文脈の中で聞き手は理解することができる。従って、「に」でマークされている場所自体が主語の行為の到着地というより、言語化されていない「潜在的な目的」を表現している。「潜在的な目的(地)」(括弧は筆者による)は岡田(2002:11)の用語であり、「『でかける』『むかう』『ちかづく』は『(場所)に』目的地の意味を与えるという構文特性を持っている」という説明の中で用いられている

(52)

用語である。その対極にあるのが、「『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おろる』『わたる』は『(場所)に』到着地の意味を与えるという構文特性を持ち……」と説明されている「到着性」である。

82) …その日の夕暮，南条の事故があつた場所に出かけることにした。

『悪霊の午後・上』岡田（2002:11）下線も岡田による

目的を焦点化する「～に走る」における「に」もこの「潜在的な目的」をマークしていると考えられる。そう考えることにより、何故方向を示す「へ」ではなく、着点句「に」が選ばれるのかわかる。この場合「潜在的な目的地」は伝言や会議と推測できる。

6) さっそく、使いが稲葉山城に走った。

22) さっそく、使いが稲葉山城へ走った。

次に、「～に歩く」について整理する。歩くのは遅いスピードであり、普通の状況であることから強い目的は感じられない。しかし普通の状況にも拘らず他の動詞を用いず、有標の「歩く」が用いられている。「遅い」という移動様態を参照点として事柄をスローモーションビデオのように捉え「歩いて」いる主語の状況を注視している話し手の姿が表現されている。そして何故注視するのか、つまり主語の状況自体が重要と捉えている話し手の解釈である。

「～に歩く」は、「歩く」という行為よりもそうする主語の状況、言い換えると「に」でマークされる場所を選んだ主語の状況が焦点化されている。従って、この場合の「に」は到着点を示すというより、「図書館に本がある」の場所をマークする「に」に類似する働きをしている。

47) 居間のソファではなく、台所に近い食卓の椅子に孝平は歩いた。

『丘の上の向日葵 209』岡田（2001:8 の例文 20）下線は筆者による

- 48) 通学路の混雑状況を調べに駅に歩きました。
- 49) 北ではなく南に歩きました。
- 50) 考え事をしながら駅に歩きました。
- 51) サンダルのまま駅に歩きました。

「～に走る」が焦点化している「目的」と、「～に歩く」が焦点化している「状況」の二種の焦点を動的か否かで考えると、「目的」も「状況」も動性は低く、むしろ状態性が高い。そこから「～に走る」と「～に歩く」のターゲットスキーマは「高状態性」であると考えられる。この高状態性が「～に走る」においては「目的」となり、「～に歩く」においては「状況」として具現化されていると考えられる。

移動「目的」と主語「状況」、この高状態性スキーマの妥当性を別な角度から検証してみたい。「～に走る」と「～に歩く」が「目的」と「状況」を焦点化するとするならば、この二つを認知主体が知らない場合には「～に走る」と「～に歩く」は不適切ということになる。例えば、町を歩いていて「すみません。子供を捜しているのですが、10歳くらいの赤いTシャツを着た男の子を見ませんでしたか。」と、人捜しをしている人に尋ねられたという想定でテストしてみる。

- 83) その子なら向こうに a) ?走りましたよ/b) 走っていききましたよ。
- 84) その子なら向こうに a) ?歩きましたよ/b) 歩いていききましたよ。

尋ねられた人はその男の子の移動現象のみを目にしたのであり、移動目的も知らないため「向こうに」ということばしか使えず、またその男の子の状況を注視していたとは考えにくい。このような場合にはやはり「～に走る」と「～に歩く」は不適切である。従って、「目的」と「状況」という二つの焦点角度、そして「高状態性」というスキーマは妥当であると考えられる。

以上の本論の分析から、何故一般に「いく」の補助動詞が要求されるのか

わかる。状態性に焦点を当てずに、動性である移動に焦点を当てようとする場合、何らかの操作が必要となる。そしてその操作が「いく」の付加ではないかと考える。さらに、この本来の高状態性のため「～に走った」と「～に歩いた」はその場所に到着したという到達性の表示が低く、たとえ「いった」を付加しても移動表現にとどまり、十分な到達性表現にはならないということになる。

さらに、「走る」・「歩く」は一般に「を」格そして「まで」格と共起する。「を」格は場所を表すとされている格であり、「まで」格も経路を「面」として捉えている表現であり、両方ともトコロを示している。トコロと状態性は互いに沿う性質を持っている。この点も本論の仮説をサポートするものではないかと考える。

本節では、視覚的に際立つ「走る」と「歩く」という移動様態が参照点となり、各々「目的」と「状況」がターゲットになっており、「～に走る」と「～に歩く」はメトニミーの遍在事象例であることを述べた。ついで、「～に走る」と「～に歩く」は高状態性をスキーマに持ち、前者が「目的」、後者が「状況」として具現化されていることを説明した。

5. 結論

本論では、これまで周辺的事象とされ研究対象となることの少ない「～に走る」と「～に歩く」が自然な例文を分析対象とした。「～に走る」と「～に歩く」が単に移動様態の相違を表しているのではないことを説明した。「～に走る」は+緊急性+予想外+非日常性を伴うフレームにおいて容認度が高く、一連の移動行為において移動「目的」を焦点化し、一方、「～に歩く」は主語の「状況」を焦点化している。

各々は視覚的に際立つ様態を参照点とし、ターゲットが「目的」・「状況」となっているメトニミー構造をなしている。さらに両者ともターゲットスキーマとして「高状態性」を持っているという提案を行った。この高状態性のため、「～に走る」、「～に歩く」は移動に焦点を当てる場合に「いく」の付加が要求され、

目的地への非到達性表示性質を持っているという説明を行った。

-
- 1 本論は湯本 (2006) を発展させたものである。西村義樹先生と、草稿段階において貴重なご助言を下された田辺正美先生に御礼を申し上げる。
 - 2 概念意味論の枠組みを用いている Yoneyama (1986) は、日本語 (Compounding) と英語 (Lexicalization Manner-conflation) には統語レベルでは相違が見られるが、GO が THING と PATH という概念で構成されるという概念構造というレベルにおいては類似していると述べている。
 - 3 有界性の弱い日本語には「クローン形成」という独自の方法があると主張している。「概念構造のクローン形成」とは「基礎となる語彙概念構造 (の一部) をコピーして接ぎ木して、主従関係の整った新しい意味構造を作る。」(影山 (2002: 38)) 形成方法を指す。
 - 4 「走る」の「速さ」を参照点とした表現は主語を「が」格でマークした慣用表現に見られる (pc. 田辺正美氏一例文も同じ)。
 - 1) 勢いよく流れる：傷口から血が (ほとぼしる) 走る
 - 2) スピードに乗っている：今日は球がよく走ってる
 - 3) 文章がよく書ける：すらすらとペンが走る
 - 4) 光・音が瞬間的に現れて消える：稲妻が走る・閃光が走る
 - 5) 感覚・感情が瞬間的に現れて消える：痛みが走る・不安の陰が走る
 - 6) 感情：虫ずが走る・悪寒が走る
 - 7) また、速い動きのために残像効果があって、その軌跡が追えるようになることから、線的に表現できるものに拡張された用法は、「ある方向に通じている：国道が走る・山脈が走る・亀裂が走る・神経が走る」さらに、この二次元的な線に方向性を持たせた拡張用法は「に」格でマークされる。「方向・傾向」が「目的」へと連続している。
 - 8) ある方向・傾向に傾く：悪の道に走る・極端に走る・感情に走る・私利私欲に走る

References

- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge, Mass: MIT press.
- . 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass/London: MIT Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar I*. Stanford: Stanford University Press.
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations*. Chicago/London: The University of Chicago Press.

- Levin, Beth and Tova R. Rappoport. 1988. "Lexical Subordination." *CLS 24. Papers from the 24th Annual Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. Chicago Linguistic Society. pp. 275-289.
- Talmy, Leonard. 1985. "Lexicalization patters: semantic structure in lexical form." In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description III: Grammatical Categories and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2000a. "Chapter 3 A Typology of Event Integration." *Toward a Cognitive Semantics Volume II*. The MIT Press. pp. 213-288.
- . 2000b. 「イベント統合の類型論」, 坂原茂(編) 高尾享幸(訳) 『認知言語学の発展』, ひつじ書房, pp. 347-451.
- Taylor, John R. 1990. "On running and jogging." *Cognitive Linguistics* Vo.1 No.1. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. pp. 21-34.
- . 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford.
- Tenny, Carol. 1995. "How motion verbs are special." *Pragmatics & Cognition* Vol. 3(1). John Benjamins Publishing Co. pp. 31-73.
- Yoneyama, Mituaki. 1986. "Motion Verbs in Conceptual Semantics." *Bulletin of the Faculty of Humanities*. No. 22. Seikei University. pp. 1-18.
- 池上嘉彦. 1993. 「〈移動〉のスキーマと〈行為〉のスキーマ —日本語の『ヲ格+移動動詞』構造の類型論的考察—」, 東京大学教養学部外国語学科編『外国語科研究紀要 英語教室論文集』第41巻第3号, pp. 34-53.
- 岡田幸彦. 2001. 「空間移動を表す動詞の分析」, 『日本語科学』10, pp. 7-33.
- 影山太郎. 1996. 「日英語の移動動詞」, 『関西学院大学英米文学』Vo. XL, No. 2. 関西学院大学英米文学会, pp. 91-121.
- . 2002. 「概念構造の拡充パターンと有界性」, 『日本語文法』2巻2号, pp. 29-45.
- 影山太郎(編). 2001. 『動詞の意味と構文』, 大修館書店.
- 影山太郎・由本陽子. 1997. 『語形成と概念構造』, 研究社.
- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』, 研究社.
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ. 1999. 『オノマトペ形態と意味』, くろしお.
- 西村義樹. 2002. 「換喩と文法現象」, 『認知言語学Ⅰ: 事象構造』, 東京大学出版会, pp. 285-311.
- . 2005. 東京言語研究所『認知言語学Ⅱ』2005年10月17日配布ハンドアウト.
- 松本曜. 1997. 「英語前置詞による『到達経路表現』」, 『英語青年』第142巻第12号, pp. 661-663.
- . 2003. 「タルミーによる移動表現の類型をめぐる問題」, 『明治学院論叢』第

695号, 明治学院大学文学会, pp. 51-82.

宮島達夫, 1984, 「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」, 金田一春彦博士古希記念論文集
編集委員会編, 『金田一春彦博士古希記念論文集: 第2巻』, 三省堂, pp. 486-456.

湯本久美子, 2006, 「『～に走る』・『～に歩く』のメトニミー構造」, 東京言語研究所
2005年『認知言語学II』期末レポート, 未公開.